産経新聞

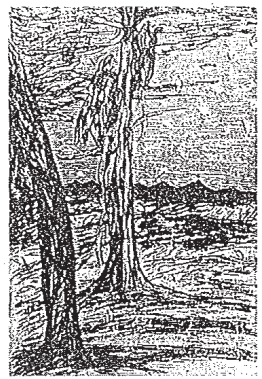
平成4年(1992)日刊7872号

6/3[水]

産業経済新聞(サンケイ)
発行所 ©産経新聞大阪本社1992
大阪市北区梅田2丁目4番9号 郵便番号530-77
郵便局留口座 大阪1-62112
電話番号 大阪(06)343-1221(大代表)

心のシルクロードを描いて

明石の画家 吉永 邦治さん



「夕日を樹上で見ている人」(アフガニスタン)

二十年前からシルクロードを旅し、人々の暮らしや風景をかいている兵庫・明石市の画家、吉永邦治さん(四七)。若いころ西洋美術で感じた行き詰まりをシルクロードが解決してくれたという。画家の目に映ったシルクロードについて聞いた。

(石井 敦)

「シルクロードは私の原点」と吉永さん=大阪・西区の高宮画廊

吉永さんは、鹿児島県川内市の出身。絵が好きで、小学校六年のころ、油絵を始めた。二十歳で東京の美術の専門学校を卒業。二十三年前の二十四歳のとき、ドイツに留学し、建物の外壁用のタイルなどを作っている陶芸家、ロッテ・ロッシェリさんに師事。絵、建築、陶芸など西洋美術について幅広く学んだ。

「ロダンやピカソより偉くなろうという気持ちでいっぱいでした。しかし西洋の絵画は構成的、論理的で、立体感を持たせるデッサンの方法や光の表現方法など学ぶことがいっぱいあって、それを身につけなければ認められない。そこに自分を殺さなければならない息苦しさを感じました」

その二年後、帰国の途中インドに立ち寄ったのが、シルクロードとの出合い。約三カ月間、ヒンズー教の聖地、ベナレス、仏教遺跡のアジャンタなどガンジス川沿いに各地を歩いた。

ぬくもり、雄大さ持つ作品

「ヨーロッパでは、人間だけが集まって都市をつくっているのに、インドは人間と動物が一緒に生活している。自然と人間が一体になったようで、素直な自分に戻れる気がしました」

もり、雄大さといった〝感じ〟がよく伝わってくる。人間だけが集まって都市をつくっているのに、インドは人間と動物が一緒に生活している。自然と人間が一体になったようで、素直な自分に戻れる気がしました」

色は、油絵の具やパステルを使いあっさりしている。水墨画のような作品も多い。

インドから帰国後、仏教美術を研究するため、和歌山・高野山大学に入学。三十一歳までの五年間、昼は大学で学び、夜は絵をかく生活を続けた。入学以降もインド、チベット、パキスタン、中国、モンゴルへ、東南アジアなどシルクロードへの旅を続け、これまでに各三週間―一カ月、十数回旅した。

最近は、団体旅行などでも行くが、最初のころは、シルクロードがブームになる前で、リュック一つの一人旅。野宿したり、大きな農家に泊めてもらったこともあった。言葉は、英語とチベット語とサンスクリット語を勉強しただけで、通じないことが多かったが、絵をかくことがコミュニケーションに役立った。

「一番印象に残ったのは、ガンジス川ほとりでの火葬。現地の人に聞くと、人間が焼かれると、煙になって雲に入り、雨になって落ち、植物に入る。それが男性から女性に入って、また子供になるという。そういうものを見ていたら、自分が巡り、巡っているものの一つではないかという気がしてきました」

インドでは、飲み物の器が全部素焼きの土器で、一回飲んだら捨ててしまう。雨が降ったらすぐに土に帰り、焼き物でさえ、永遠に形を残さない。食事も木の葉の上に置いて食べ、日常生活のあらゆる面にそういうライフスタイルが染み込んでいる。

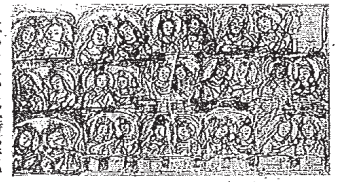
「日本は、どこか生き方に迷っている。シルクロードの人々の生活は、われわれの生き方を見直す参考になるのでは」

また、おびただしい数の仏像を彫り込んだアジャンターの石窟寺院(紀元前二世紀―八世紀)をつくるのに使われた鉄のノミが、もとは一㌢ぐらいあったのが、十㌢ほどになって残るなど、民族の強い意志を感じたそうだ。

さらに、いたる所の壁画に真珠が多く描かれ、遺跡から出土した王の装飾品にも真珠が使われるなど海への憧れが感じられる。正倉院の宝物の唐草模様も真珠を表したもので、東西文明の交流を肌で感じたという。

「華厳経の中に『雑草の中に宝あり』という言葉があり、薬の王様から見ると雑草も薬であるという意味ですが、一度自分を捨てて西洋人になろうとした私が、シルクロードによって自分の中に〝命〟という宝があることがわかりました。私の絵は、命の日記帳です」と話している。

自然と人間 一体の生活に感動



「天宮伎楽」(キツール石窟・西域)

「ホータンの少女」(西域)

美術でもそれは当てはまる。西洋では、自分が作ったことを誇示するかのように、作品に作者のサインが入っているが、仏教遺跡の彫刻など東洋の作品には、それがない。「自我を超えた民族全体としての意志を感じました」

これは、その後の吉永さんの作風に大きな影響を与え、「こういうふうにかきたいというところから出発するのでなく、たとえば川の前に立ってさわやかさを感じ、川とはこういうものとイメージしたら、それを十年ぐらい蓄積して、出来た作品は、まったく川とは違う」というようなかき方をするそうだ。

実際、吉永さんの作品は、簡略化された大胆な線で人物や風景を描き、遠近感などはあまりないが、温

スターメモリー

シャバーナー・アーズミー

インドは年間八百本もの映画を製作しているという。とはいえヒンディー語、テルグー語、タミル語など十以上の民族語圏でそれぞれ独自の映画を作っているから、各語圏の製作本数は多いところで百五十本前後、日本とさほど違わない。

しかし、日本で公開されたインド映画という上映にほぼ限られており、多くの人には、ヨーロッパやアメリカ映画の舞台としてのインドしか知られていない、というのが現状だ。

シャバーナー・アーズミーは、インドを代表する美人女優であり、社会的にも熱心な平和運動家であるが、彼女の名が世界に知られるようになったのは、インドを代表する監督のベンガル語映画以外は、非商業ルートでのみ上映されていないこと、故サタジット・レイ監督の「マダム・スザーカ」に出演してからだ。シャーリー・マクレーン扮するピアノの先生、スザーカのもとへ通う才能豊かな少年の母親を演じていた。その母は我が子のために身を粉にして働き、ひたすら息子の出世を願うという、いささか母性過剰な女である。近年のアメリカ映画「シティー・オブ・ジョイ」でも、夫にひたすらつかえる三人の子の母を演じている。

インド映画におけるシャバーナーは「芽ばえ」(七四)というデビュー作で、結婚したが妻の座にあきたらぬ女の自我の目覚めを好演して一躍人気者となった。

娯楽映画中心のインド映画にあって、彼女は芸術性社会性の高い作品を選択している。「渡河」では、貧しい者が支配層とたたかって追われ、夫とともに妊娠中の身で河を泳いで渡るという役、「希望の行方」では、井戸を掘り当てようとする夫に代わり、家族を養うため働きに出る妻の役、という風に。

そして、どの作品も見事に生活感をにじませながら、美しさをそこなわないでいる。現状を良しとせず、女性の地位向上を求めるまなざしがあるからだと思う。

(岸野 令子)

生活感と美しさ兼ね備え